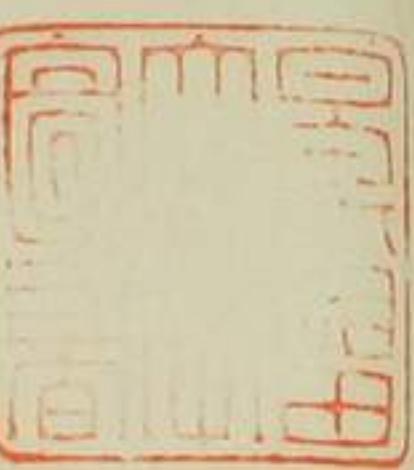


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

和装本

ケ 5
44
88





武馬必用序

武人經考箭、繩、馭馬、豈有
一歲凡世有千里馬、馭者不
常有自辱於奴隸人之于茲
齊藤定昇受馭道于大坪家
最角立者也妙術手段出廣

秀之門精勤鍊行，銳意於道。
聿觀其所著之武馬，必用大
坪之傳至定竟，而獨得其宗，
多僕又幸步于其階梯，及于
此門者皆奇偉雄傑，得冠一
時。誠知要術奧義之精而恒

其德耳。今以棄禮、軍相醫，為
五馭，其說詳也。可謂文武並
資乎哉？欲續此術者，何可庶
斯畫哉？故明士馭之，故實而編。
足之洵是。聞其傳云爾。

旨

享保二年次丁酉仲春

朝敵大夫志州牧藤巨澤
題于詠歸齋中



大坪本流武馬必用

序

天地よりて乾坤の道、牛馬よりて流暢文墨感して、善のため生を重んじる者ありめりかのく大抵の士は其くわざるゝまゝ古今を易めし之攻牛馬のれ質も異とし、下も牛も馬も、遂の徳ありも其健ゆて堪え、素人うんち古の法とすひ理を知

法、以ありうて姿を重んじよ
るともぞ、墨をもに禮のとくみま
本もひとと清く寒わくふせてもめや
倭かく碑小笠原内歴のる書わくも後
大和流、條流、藤流の謹方の書、り
鹿江子馬經大全王良相の經元亨良
も集の妙、子本の書ありば、倭子波
せるも書多一美多云の文記、聖德太子の
収駕年記子うり取る年記と日本武の
實間子銀子うりて子也波里あらわれと

近代の主事人ナモアシムとソラアモル、
キナリナリナリナリナリナリナリナリナリ
駆軍収の古実を行まざるよりて、
たゞ、教皇をかぞしてして謹方の書を
のこらむれど思ひ方々、ニヨリ、通代信
一、遙子房の病とそされど、まのゆと
おるとソトモ常収、軍収のアソシ
連いそなあと、すの字様とゆくにせ
も、やう軍収ナソテ、アソシ、昔の

人代ひすもづひ故我のむだと考へ
大和を文武のひたして上天子うりぬ
軍事代沙式日ゆもと馬を乃と利(?)
らる外も武藝と云ふんうれく
乃教をあそびてあす半と逆方子
底てむねく年月と遡り事あひにし
れぬもととまき武士學士農工商
商子もね半くとおとねり前神功
朽木もんもあさりとおとねり前神功
屋店も女里をかくらませども武道小

哭く是をと仰哥す、まひて今天す
武とがやう、経ひるゝ一中じよ已と
ひー女を武小能集、里を一再參り
まつて男としてちあひて、武のひをか
くことよわゆる文書を編。いは字の
事に武の道とあせて古の風流を
含みんと思ひりむので、予えうり
は天和二年のを武の先矣集と題して
せよ弘めゆりこれと五年のひ京於大吳
のおり摺板焼失ぬとのあけりゆく今

又辭る代子生きて候事より
あり事終り書加く及事沙一筆も版
やるる事あれば今あく手板をも
一めく武馬必用とて世子弘光侍の事

大坪本流武馬必用卷之一

軍馬

目錄

- 一弓馬が武士の者一子勅(ア道裡)と云フ
- 一古今の大ねる、珍奇で極益ある兵劍
附和漢の勇士言ひの事
- 一馬半感意の理ある事
- 一馬を携くぬくに及理の事
- 一軍のるまくすうりて得手の法と知る事
- 一軍馬訓一ノ変
- 一猿引る伏事寫しの事

一極精の事

一川渡の事

一物見のる用件

一る鎧の事

一る入三版の事

一る武の事

一浪死事と云ふ事

一圓錐空の事

一馬歩の倒れる理致初の変

一馭馬流美の本末の事

附古流立理の事

大坪本流武馬必用卷之一

東武

孙藤定光彙編

一弓馬歩武者も一弓射一弓道より一張弓矢腰にて天下を納む乱よりて出るにて主と辭め堅と破り危との道陥自をあらじるに酒あり及ばず焉ら馬の家もあらずとぞたとちむとあると名付て弓射ひとも武士も弓を射ひ立つるやう又或弓射す矢す羽箭せんとは射すやくわゆく也と縫ひせんはるか哉かく一もま是無事の本通りの事もありとも記せつ考ぬ

西流の宗師曰日本武学の祖と云ふ。武若論十、
馬の死以自立代殊家矢を坊魔忍の良賤とも
あらず。此馬子焉づら一人ど、武士とはソレ
モトと雖猶あくソシモとモ波及する人ひる
まぢ一内も報とは腰子持るあり。然るも
私財の財は日月の勤かれて去門の者あり
されど世人の口を經てよがりて故名古
利智まれのうか。衣食飽暖の作り廻と毒ひ
の事とするもあり。其の勤きをもと浮浪者
ありぬ。千波名利のひよしき字人也と云

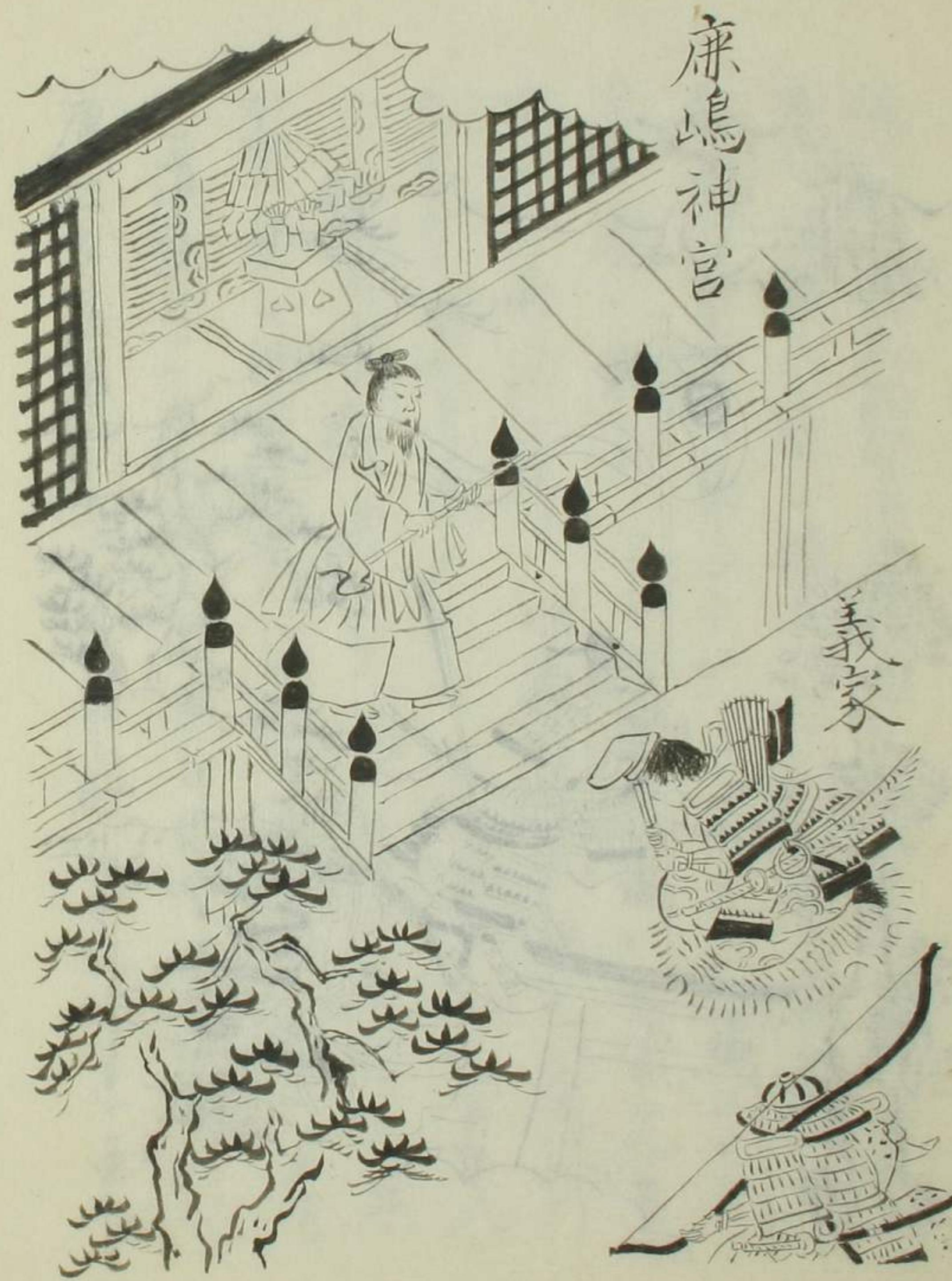
もうくると紙扇とて拂ひとむらそう
木馬かとぞへ當るてより。ふやしにまと
ひゆ通と感ひもするかくちうしてせ上の奴
童がと感上子かりゆ人めりといひ世後有名
なとせられのまたを知りゆつゝあらんやうて
名利十難として滅の地りあり。事之

一馬を國寶毛武運の毛飛仰るわがり。頂頭を望
毛羅とし名毛子を武功と立異奉毛毛一撃
霸業をあこせり。毛娘の既毛皇子。甲斐の
驥。あすれ絶列の逆浪と號せ。あく主法を真一

後ノ契丹の太耶律洪基も小宗一郎子也。ひづ
陸て从軍の難と逃りかへひ主を尊。也
平家の脅威も良るすよ。少しおと海とも
里て敵の旗とのつゝに陸と義経の走吏も
古今の奇功を立て。謙信の保生月毛公代の
名奉を取せり。またね。人を殺す人を殺ん
だめ。まことに。總て。馬。刀。弓。手。それと。箭
袋。の。輩。を。逃。ま。じ。ひ。以。ち。り。馬。足。も。手。先。や。あ。い。あ。走
と漢武をもとね。大寛と伏て。武と蹠。
唐公も。五産の。あと。食。甲。敵。ふ。そ。う。と。也。



うへり可我五代素の仲根家坐る所本下
也と云名る少子也と夫ひ乱と沙せり比濱より
ふとらむ一丁也不及ハ士子也沙アリ但中庸ナ
以ヒを以く河邊の乃子也右寺す古河小戰と
有る也ハ亂アリと好ニ先立トアサハ民ノ
用アリ用アリ不遠人を却て民の害となる故
土寧アリもあたどもアリノシテ沙アリ
一トセキハ内ノ力の足珍ニモアサリ
史書云劉裕引股の肉代走一走を之嘆
云我乱世不生人名成情ニ功伏重一四也



の上手をさる日よりから爲子報のあ
る肉胸瘦骨少微也今体もとまつま
本月股の肉肥りと大功を爲人の勤めれかく
乃と腰玉の名前をあらわせサ年よりあると
知りよ少小神と仰て康鴻の内は珍貢
仕官位の良れと年月金錢一衣済家廟の
別歎と曰夜戰く仰小東夷と手渡（珍）大
庭、そ此上了のうすよりて往來八郊の矢前故
多難攻保て又源平ノ兵士平野方
うち景清暨次郎と一大剣者と始て二十

騎ひて却くと無言文子車ひり若ひて
連立あはれよと小鹿にて迎合もるとあらま
皆城内に入りて至重印領をもじそがむつ
人の持手なまきを藝能をうけに付す廣
持出の旌旗を立貝古鼓となまくて魏
声とあり車子の如きを合て軍の核取たる
るか教已う節とせう季方也小なりて未
功を立一人の子孫比安神にて高坐とみ
先祖の上のみくちの如きをうらふ津川
天理子方の事あり宣和承わる

お化人とみえて我身と多くいわれても
はわゆり又或曰記と云ふて大を收録久々之
る、農工商賈とあくまでもうつてゐる乃ち職と
勤む武士いち馬代は傷重のたゞ以次知らば多職
とす学問とひそ事もば家業以あらず
せんうるあり今う馬代持て訓ばず子事而
善と或一概子家事法師かとあるが、以爲
人い本式とちひ別寓子至る系因紙持て
人の因と芸わゆり又云國守十才役づる
武官に全くる所爲不ありと云ふは等の

羽毛あるさうの小心小詫走へ

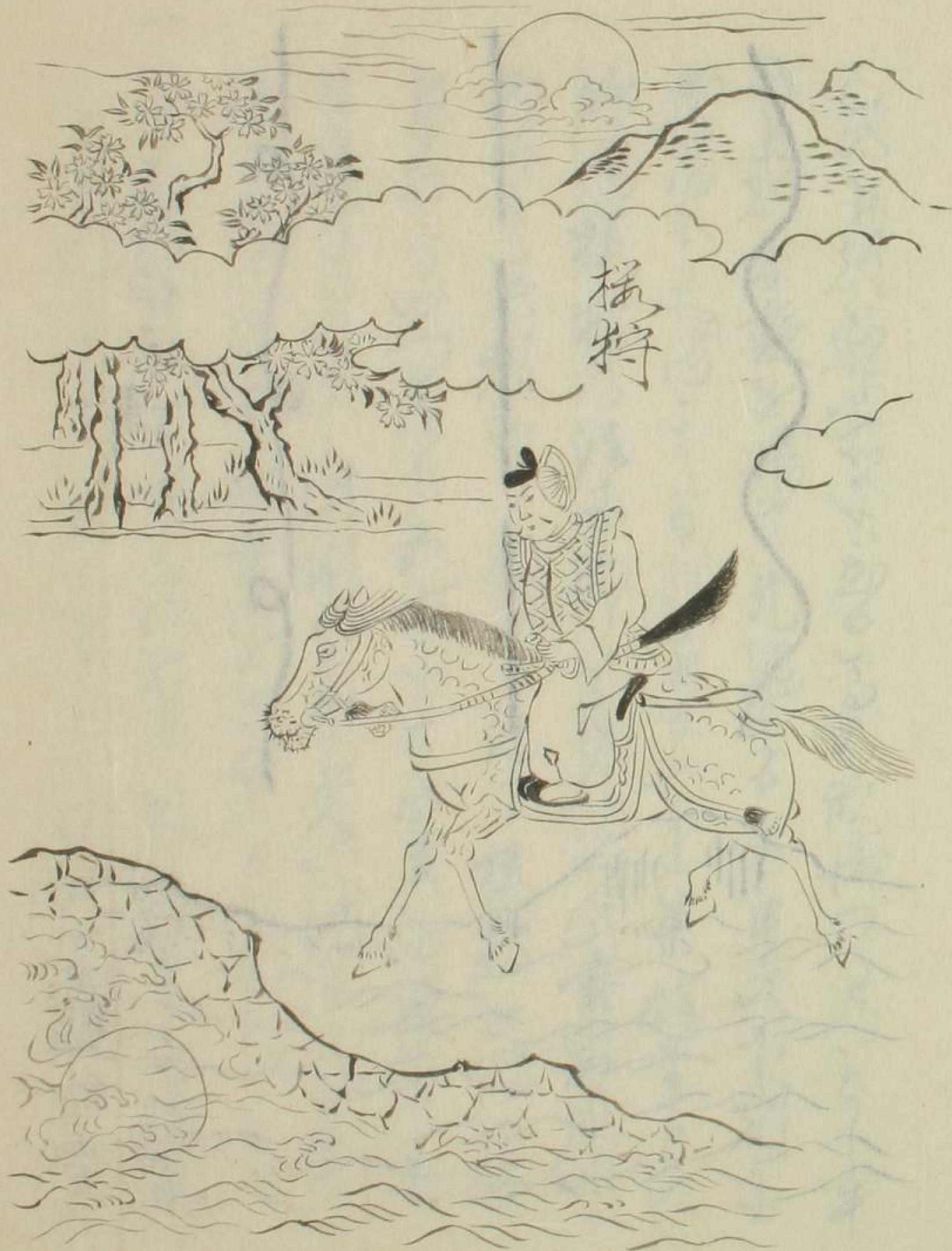
一軍のる、期がタマチテ訓へて免り自生子家
入へて教法を訓さすすら小治する、人とおお
ひて天地十才るやうてニ高乃家上よりとも
感應ありて能く伏御する也、ば尊右の教と
可と云うる人、お小僧やうと、もしすまと
おと立下者は漢の劉備城の直を敵小をそ
も既小をうり内家の名を家名て云今日是
事急之却る、とてお一報を加へ方る馬
俄小勇一跳の擅漢を飛越て難と過る又天正以

國の内秦の元魏を後醍醐天皇が廢帝とし、成軍故
と今も教化一統既に失ふる事十日紀事とす
名の事なりて何事ともかく翔來りて元魏の
命を取ひにしも不吉きもの毒物勝負争うて
即ち神めのあらへ室代ひ以て急教(高)

といふものもふとこうもいふもんや

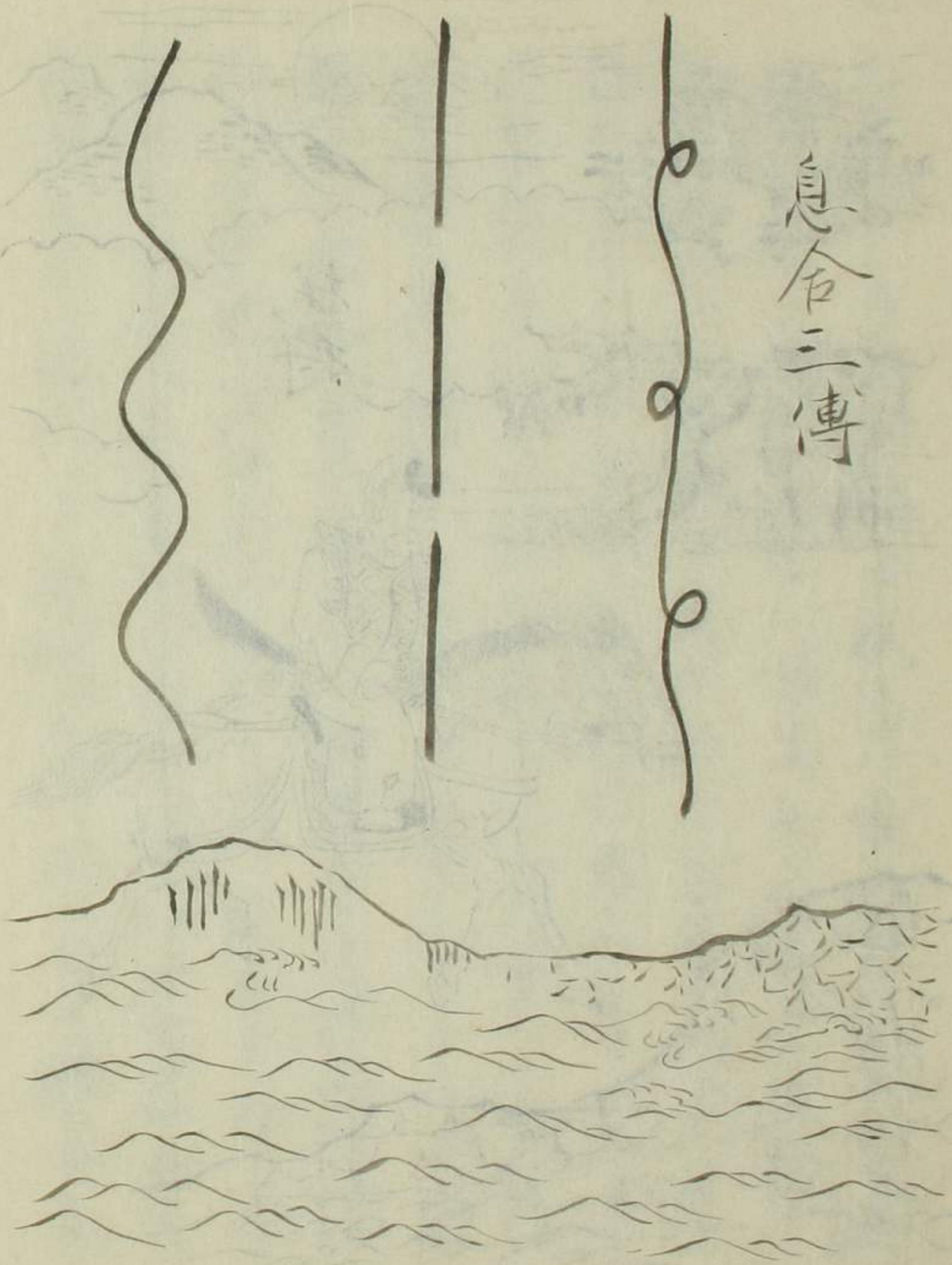
一古(よりをひ)の和漢の記述と云ふ事跡と
同する所もと云ひ所も強もて(いき)悍也る
豈ふ悍也れ致功を圖るも例と未だれ然
りて自己小弱する所強もとあるのありま

田子市、名前をもててこそ保地と七尾半島一地区
うちも人糞色に赤て小玉合せ半球形をすらる
已うまたげひるる紙を(す)事より拂ひ取れど竹
縛のるる小糞も二寸半力を要みて足強く
して重音半筋とぞ紙好とすると書も半筋
一筋下はすりて連者すて重音半筋とぞ
一背の仲るる紙もくつるとして
一軍のるい身一年目とぞや口紙(しき)け旦(あさ)ひ
教(じょう)と浮る所に人を親(おとこ)と云之
一海陸と車に馬と船と舟と私中(じゆちゆう)と云之



一をすと云事へ倭ナ極持の事（）幹の至る處
をもあつ幹の至る百里余の事（）王歎く
也活（）ありて歎せしもの方（）モ
功（）きくと（）あき幹の至る處（）小見（）之
の事（）とい繫（）の所（）をかくりう事（）もたは
は東千里と限（）むらの道（）をあらわして、も功
限（）す事（）又考（）あられ、は還志（）にゆ安（）には
あり是れ洞子（）代寫（）ありしニケ後事（）もありテ
天和（）三月廿日出（）寫青（）としるよもて
東陽（）より相列（）小坪村（）とづらすて馳（）る

息令三傳



このト列々と西子のもの故物アリと年
の上別名敵と揚て此處をト子中のト列子
食湯ナシ^レ西子の付是をナセ里羊体また
昨夜梶村の法ナシ^レそんが事万々
あり^レ教アリ又ナラ流子梶村とは下
幸アリシテナリナ付ナセ里と池^レ馬
半満^レアリ^レは御と幸^レアリ^レ少^レ
流子^レアリ^レ之功孝^レアリ^レ
一河を以^レテ事法アリ^レ教^レアリ^レ一清波
ノ^レ村モ^レ少^レアリ^レ伊^レ木梶原生

考據至るまで、之の内に、
世子塗とゆせり、田原又ち部島山を、
重なるもの法を以て、
す。世子山の邊、小馴馴水曲と、
便の山の山の、あり、大河あり、小
河あり、海あり、奥あり、石有り、砂
川あり、渓あり、沙子被訓にて、人あり、
魏、そそごとく切あり、やとが、
一、曾の兵衛も、此處小町と教へ、
一騎、やえ、維え、足の、を、あう、た、あえ

中、めぐらし、小、又、る、よ、か、小、は、久、あ、み、
こ、る、至、者、小、あ、ま、し、て、軍、代、が、ひ、ど、る、
事、あり、

一、馬、六、首、そ、て、る、達、の、そ、り、あ、り、甲、子、モ、
一、場、あり、

一、弓、入、三、限、射、ひ、く、施、ひ、く、の、筋、ね、あ、り、
一、京、印、京、山、の、は、有、
一、弓、鉄、こ、り、一、奥、鱗、十、魚、と、鉄、伏、馬、鷹、翼、
一、雞、と、り、一、奥、鱗、十、魚、と、鉄、伏、馬、鷹、翼、
厚、引、小、連、く、橋、と、河、一、手、小、さ、り、て、別、子、

ナラムリ別に離れて一馬にぬりナ
ヌラムリともいひゆすたとらル右京
セラ雷鬼石大のとく鷹も角龜十文字
八花瓶子を破て迎坂池西シロヒ自立
ナラムリマツて源氏一馬シロヒ万葉歌
ヌナムリ

一或兩馬トモ老の板ハタ是いふ土の越是
キヨ上アカシの力サカと云て神と遇ウカり大
阪大丸慶マハ方の流域カワと云うて、軍馳
の事あんや御ミてありトシあるき皆也

意シテも場次端ハタケる事ナシ事ナシ
ソラノ河カワも今人呼ハス小毫原流コハラ内ナカニ流カワ
外スバニ馬カのハとシ人ヒト又アシ放ハシ走ハシてハシ
少シり入ハシ和ハシ流カワ入ハシ原ハシも毫原コハラも石シ家ヤより
あく唐カタ流カワのハとシるハシとも酒カク方カタ石シ
もたなはせハシる事ナシ

一鶴雲カクラと灌カク通ハシる事ナシ事ナシ
了シむシ教ハシあり云事ハシのハとシれと迷ハシ下ハシ
さき内シタニまシい歎ハシと但ハシ付ハシとせんハシりハシ義ハシ
をも経ハシる人ヒトもあハシるハシとシ西ハシ流カワ

被虫モリリぬと之いもす。蟲アカリホ
ゆきい腰被是是を被葛の統ナシ
一或軍書以スモ一軍事の事ハアシカ
加ムトモモモモモモモモモモモ
ト軍士意をあらう。ハハハハハハハ
補良の日の中の軍北れもモ例の功
あり人ナマセ多々多々小とての教
えナラリ。准今のせれアハアアアア
者の世波ね波ナアアアアアアア
清和天皇ナアアアアアアアアア
直純親王。源姓以下アアアアア

ヒ軍旅ナ記村臣ナ記馳るナ記アテニテニテ
アテナテナテナテナテナテナテナテナテナテナテ
皆ナラウ馬兵のア盟アリトアリアリアリア
チナナナナナナナナナナナナナナナナナナナナ
アアアアア事ナリ

一人坪流アハ傳ナ吉家アナリ。醫汉相馳
常汉軍馳れ取のア馳及ヒ系。治汉馬ナ記
一要言のア医的。ア傳モニ。仲利及高義云
ナリはアトア坪廣。秀ナシアア不尔。ア坪
流。アアア内差流も義多アアア特ニ高義也

醫相事礼軍の弓取とはして内をた
金者ナソリテ右本校内反流とある
小笠原流も美多ニナリ新羅之流
先驅相事礼軍の弓取とは拉シく小
笠原家傳ナリ發アリ右本校小笠原
流とある又家ナリ真人武則醫者
礼軍の弓取とはモはアリ法師ナ
ヒニカド彌倉にくち馬連人の寺
口人ナモは弓取紗ナリ右本校流
四家ナワツミノ四院とある中ひみと

大和流ハ傳流ニ至る流ありナリテの
流也唐馬流ナリキル之今附の流矣
内及ヨリナリトナハナス小笠原家
又母中納門も傳ナリ内後也ナリ是妙
御の子思あリト傳ナ一妻の流也
アリ准モ一色の伝也人ハ流也ア
リナヘニトナリナリマレケルの平也ア
リナヘニトナリナリマレケルの平也ア
リナヘニトナリナリマレケルの平也ア
リナヘニトナリナリマレケルの平也ア

モアリ、みどり十人評小流と
加え大坪廣秀の四人教子人を有
先済の挽十四手あり、息村上永幸の
免許の挽七人あり、秋彦重志めんぢよ
の挽三人あり、秋彦重志の四人教子
人免許の挽十人あり、重忠と教子は
襲の而以取理念。して、遠少駄子三
組と金剛一金敷を以て制の長局と
ある。まより以東补充の事小平作事
の事あり。また、重忠より伏木不義禪へ

は、下野松原の大坪流に勧すと
シテ、以人新兵集とするる事、以沙良
安義等好きす。細川康政及の荒井安
志子は、一枝系の大坪流支陽子ひう
まよりこそ康政の挽子田上右京、進秀
江あり。上田吉三也秀吉あり。牛角の
家入類葉のく坪流幸政明智の人々
荒木安志の息十五手、尉え滿と云ふ
者あり。幸政上手の位子守れる人あり
えも類葉の大坪流あり。石の吸盤の

掌も筋走るが如きの不直りある迄
ありひ外平松之系類葉の大坪流
也すまし

之れは大坪流の筋走るが如きの不直り
ありひ外平松之系類葉の大坪流
也すまし

